

Title	唐代傳奇小説「虬髯客傳」の道教的儒教的背景
Author	中山, 八郎
Citation	人文研究. 6 卷 9 号, p.703-715.
Issue Date	1955
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

唐代傳「虬髯客傳」の道教的儒教的背景

中山八郎

一

唐代の伝奇小説に虬髯客伝といふのがある。支那文学史の上では相当有名な作品で、太平廣記・說郭・五朝小説・唐人説書・筆記小説大觀・顧氏文房小説などに收められて居り、魯迅も此小説を校訂し、稗辺小説に於いて此小説に対する見解を披瀝してゐる。此小説を考証したものは支那には可成りあるが、その紹介は別の機会にゆづるとして、手近かなところで我國の塩谷温博士の「支那文学史概論」一二〇頁をみると、これを唐末の人杜光庭の撰とし、「此篇太平廣記には作者の名を記さず。諸書は多く張説の撰となつてゐるが、今宋史芸文志並びに顧氏文房小説によつて正した」といひ、その梗概を述べて、

李靖一布衣を以て隋の司空楊素に謁し、共に国事を談じた。時に紅拂をもてる妓あり、慧眼にして客の大豪傑なるを知り、夜窃に靖の寓に投じて意中を打ちあけ、共に太原に帰らうとした。途中にて虬髯の異人に逢ひ、紅拂と同じく姓張なるを以て兄妹の約を結び、靖と談じて大いに喜び大將の器であると思つた。やがて太原に至り、客は靖に由つて李世民（後に唐の太宗）に謁し、退いて真の天子なりと感嘆した。後約して靖と長安に会し、尽く己れの財寶を靖に与へていふには、余もと大功を此世に樹てんと期せしに、今真王の出づるあり、余はもはや用なし、太原の李氏は真の英主なれば三五年の内に太平を致すであらう、君は不世出の才を以てよく之を輔けられよ、後十年東南数千里外に異変の起るあらば是吾が志を得た時であるから、君は幸に妹と酒を瀝いで賀し給へといひ了つて

馬に乗つて去るかと思れば、数歩にして忽ち見えなくなつた。世民兵を起すに及んで、李靖は客の金を以て世民に献じ、遂に大業を成就した。貞観十年適々南蛮人が奏していふには、海船千艘甲兵十方あり、扶餘国に入りその主を殺して自立したと。靖は虬髯客の成功を知り、紅拂と共に酒を東南に瀝いで祝拜した。

といはれてゐる。太平廣記に收められてゐるものには末尾に出所を明記して「出虬髯伝」とあるから、虬髯伝といふのが此小説の本来の題名なのであらう。尤も撰者のよくわからない劍俠伝卷一に收められてゐるものには題名が「扶余国王」となつてゐるが、劍俠伝はさう古いものではないから、それが本名であるか否かは疑はしい。此小説の翻譯は塩谷博士「晉唐小説」國譯漢文大成 文學部所收並びに内田泉之助氏「晉唐小説」漢文譯 座所收のうちに唐人説書本を底本として掲載されて居り、杉本行夫氏「中国の短篇小説」のうちにも收められてゐる。杉本氏の翻譯は典拠不明である。梗概だけを紹介したものには上記塩谷博士の文學史の外にも、有高巖博士の「唐代の社会と文芸」一九一九頁その他数多くあるやうである。私はいま此小説使用されてゐる数個の表現をとらえて、作者の儒教的道教的配慮の程を窺つてみようと思ふ。

二

にその第一は隋朝の権臣楊素の肩書きを司空としてゐることである。此小説の書き出しは楊素が晩年権勢に溺れ剛岸無礼を極めたことから始められ、「隋の煬帝の江都に幸するや、司空楊素をして西京を守らしめた○中素は奢貴自ら奉じ、礼人臣と異り、公卿が入言し、賓客が面会を請ふ毎に未だ嘗て牀に踞して見ざるはなく、美人をして捧出せしめ、侍婢を羅列し、頗る天子の礼を僭し、末年益々甚しきものがあつて、もはや自分_{○中}に負荷せられた所を知り天子の危きを扶け顛へるを持へんとする心など持ち合せなかつた」と書かれてある。この描写は隋書楊素伝を参照することによつて、詳細なる事實の裏付けを得るであらう。さうして右文中に「危きを扶け云々」とあるのは、いふまでもなく論語季子篇の「危けれども持えず、顛へるも扶けざれば、則ちいづくんぞ彼の相となさん」によつたものであり、ただ小説の文では扶と持の両字

が入れ換つてゐるが、これは不用意の錯誤とみるべきであらう。楊素のことは唐の温大雅の大唐創業起居注^一に、大業十三年六月にかけて、裴寂等が唐の高祖に言つた言葉として「楊素国を亡し、家を失ふ」と見えてゐるのが、言簡にして最も要を得たる批評である。彼は已に文帝の末年に尙書左僕射としての余りの権勢を疎忌されて實際の政權から棚上げされかけたが、文帝の急崩と煬帝の篡立といふクーデターに主導的役割を演じたことによつて、煬帝即位の大業元年に尙書令となり、尋で太子太師を加へられ、翌年司徒に拜せられ、此年官に卒し、厚葬を賜つたのである。とはいへ煬帝も亦彼の権勢を猜忌し、彼を厭殺せんとし、表面彼を尊重するも其の死を希ひねがつたものゝ如く、君臣の關係は冷酷苛烈を極めたのである。当時の彼が、隋朝の宰相として廷室扶持の任務に缺くる所があり、専ら身家の富強の増大に急であつたことは紛れもない事實であつた。彼の歿後、その子楊玄感の叛乱によつて彼の身後は族滅を余儀なくされたのであるが、それは免も角として、彼の官職は右の如く司徒であつて、此小説にいふ如く司空ではない。また李靖が楊素に謁したのは、新舊唐書の李靖傳によれば楊素の左僕射の時のことらしいが、此小説では煬帝の江都に幸した後楊素が西京を留守してゐた時のこととなつてゐる。その時楊素は尙書令となつてゐたのであるから、此小説の時を生かしていへば、「尙書令楊素をして西京を守らしめ云々」としなければならぬ。かくみて来ると、此小説の作者は誤つて司徒を司空とし、しかも繫年を左僕射の時から遙か後にズラしてしまつたものと考へられるやうである。尤も支那の官僚は昔から一生の履歴のうち最終の肩書きを以て呼ばれることが例となつてゐるから、後の人が楊素を呼ぶ場合、司徒楊素といふのが普通であつて（例へば隋書の楊玄感傳に「楊玄感は司徒素の子なり」とある如く）、この場合もさうした意味で司空（実は司徒）と書かれたといへるかも知れぬが、それにしても司空は事實に合はない。また此小説の諸版本いづれも司空に作り司徒となつてゐないのを見ると、初めから司空楊素とあつたもので、伝写の間に後人が司徒を司空と誤つたものではあるまい。してみるといよいよ作者の誤りのやうに思はれるが、しかし楊素の如きエミネントな人物の肩書きを時代の余り隔つてない唐代の人が誤るといふことは如何なものであらうか。これは何か理由があつて、作者が故意に司空としたのではあるまい

か。一、此小説は従来の研究家もいつてゐるやうに、唐人の作であり、隋朝が天下に君臨したことを天命とし、隋朝の

か。一体、此小説は従来の研究家もいつているやうに、唐人の作であり、唐朝が天下に君臨したことを天命とし、唐朝の万歳を謳歌することに終始してゐることは全体を通観して疑ふ余地がない。そこで左傳をみると、桓公六年の条に「晉は僖公を以て司徒を廢し」たといふ文が見えてゐて、その意味は晉の国ではその祖先の僖公（周の厲王の時に當る）の諱が司徒であるので、司徒といふ官名を廢して用ひなかつたといふのである。さうして晉の後である韓に於ても之を用ひず、晉の舊によつて、司徒の代りに申徒の号を用ひたといはれてゐる。翻て考へるに、唐朝は實に晉の故地に起り、その星は晉星であつて、晉の系統を以て任じてゐたことは周知の事實であるから、唐室を尊崇する此小説の作者が左伝のかかる故實に基づいて殊更らに司徒を用ひず、さればとて申徒の如き異様の代用称号も避け、同じく三公の一つとして近似した司空に改めたのかと思はれる。

此小説に左伝が引用されてゐることの端的な証拠は、虬髯客が長安の自邸へ李靖夫妻の來訪を請ふて述べた言葉のうちに李靖夫妻の見すばらしい様子に同情して「懸然如磬」といつてゐるのがそれであつて、左伝の「室如懸磬」に出づるところは既に塩谷博士の指摘せられてゐる所である。²⁾ 遮莫、論語や左伝などからの單なる成語の借用——それは支那の舊文學の常套であつて此小説に限らない——が此小説のうちに見出されるといふことより、寧ろそれら古典との思想内容の關聯こそ注意を払ふべきではなからうか。因に此条の原文は「李郎相從一妹或作魏李郎在復相從一妹懸然如磬。欲令新婦祇謁。兼或作議從容。無前却或作無令前却」となつてゐる。末尾の「前却」とは「進退」と同じで、原文の意味は李靖が貧困のため落付いて仕事も出來ず、彼方此方することを余儀なくされてゐるやうな、哀れな境遇から脱却させてあげようといふことである。ここでもおもひ併せられるのは、易の巽の爻辭の初六の条に「初六、進退す、武人の貞に利し」とあり、象傳に「象に曰く進退すとは志疑ふなり、武人の貞に利しとは志治まるなり」とあることで、「無前却」のうちには易の此の考へ方、すなはち志持する所あつて疑懼する所なく、武人らしく柔弱を排して剛貞の志を持つやうにとの意味が寓されてゐるのではなからうか。或はここまで考へるのは少し思ひ過しかも知れないが。

次に、此小説の主人公たる虬髯客その人についての考証³⁾はここでは省畧するが、ただ此小説でそれが道家的神仙的人物になつてゐることは一見して明かであり、従来の研究家の間でも定説となつてゐる。また彼に付添ひその指南役をつとめてゐる人物のことを彼は道兄と呼び、作者は之を道士と記してゐる。道士臭は此二人だけでなく、此小説の最も尊崇する真天子たる唐の太宗李世民の風態も亦然りである。ただ太宗に於ては一面儒教的でもある点に注意がひかれる。節を改めてこのことを述べよう。

三

此小説では、太宗が初めて虬髯客の前に現れた時の風態を述べて、「不衿。不履。裼裘而來。」と記してゐる。「不衿」とは肌着を着けぬことであり、「不履」とは履物をはかない跣足のことであつて、いづれも道家神仙の風姿である。「裼裘」は邦訳では「袖を巻く」とも「裘を肌脱いで」ともなつてゐる。「袖を巻く」といふのは採ることが出来ないが、「裘を肌脱ぐ」といふのは確かに有力な一つの解釈である。ただ邦訳者はその理由について裼の字は袒に通ずるといふのみで、太宗が何故にかかる異態をなして現れたかについて何等語る所がないのは遺憾である。私はここにその事情を説明するものとして、Edward H. Schafer 氏がその労作 *Ritual Exposure in Ancient China*⁴⁾ のうちに於いて、大畧「袒・裼・裸はその意味相通するものがあり、身体の一部又は全部を露出することであつて、さうすることは周代の上流階級の葬礼の一特徴であり、さういふ風習は一般に身体を露出することによつて超自然界に厭勝し得るといふ思想の一つの表れである」といひ、「古代地中海世界に於いては、かかる場合往々にして裸体の代用として跣足が行はれ、古代支那に於いても時として同様の代用がみられる」として礼記のうちからその例証を引いてゐるのを指摘したい。すなはち「裼裘」とは古礼の葬礼であり、超現世的人格たる虬髯客に対する厭勝を意味するもので、隋末乱離の世を定めて暗に天子たらんとするに此異人を葬るの礼を示したものである。さうしてそれはいづれかといへば儒教的色彩を帯びるものである。「裼裘」

を以て「裘を肌脱ぐ」と訓む場合は、かくの如き支那に於ける身体露出の古習を念頭に置かなければ十分な納得はゆくま
いと思ふ。

さて「楊裘」を右の如く訓むのは確かに一つの興味ある解説であるが、別に私はこれを楊裘を着ての意味で「楊裘して」
又は「楊裘もて」とも訓み得るかと思ふ。その理由は清の王端履の重論文齋筆録八卷（紹興先生遺書第三集所收）に「楊
裘」を論語に見ゆる「衿絺綌」と対照して、次の如く論じてゐるからである。

論語〇綱 党篇に「暑に当りては衿の絺綌必ず表して而して之を出だす。緇衣には羔裘、素衣には麕裘、黄衣には狐裘」とある。衿とは

ひこえ 単のことで、孔安国の注によれば「暑には則ち単服する。絺綌とは葛のことであり、必ず表して而して出だすとは上衣に加へること

である」と。余の案ずるに、衿の字は下の緇衣・素衣・黄衣に対して言つたもので、その意味は裘には必ず楊があるが絺綌は単衣で
あつて楊がないといふことである。蓋し裘に楊を用ひるのはその美しさをあらはすためであり、絺綌にはあらはすべき美しさが無い
が故に、楊を必要としないのである。……梁の崔愷恩の説によると中衣の上に裘を加へ、裘の外に楊衣を加へるとのこと、さうだ
とすれば、中衣は裘の内に在るわけである。かゝる裘制に準じて絺綌を考へると、中衣は矢張り当然絺の内になければならぬ。

「必ず表して出だす」とは、必ず絺綌を以て表となし、内に中衣を着て、皮膚の露はれるのを防ぐことを謂つたものである。公門に
入る場合には上服を加へなければならぬのであつて、さればこそ礼に「衿絺綌もて公門に入らず、表裘もて公門に入らず」とある
のである。衿絺綌と表裘とを連言してゐるから、此の表の字は正しく絺綌を指して言つたものである。朱註に「先づ裏衣を着し、絺
綌を表して之を外に出だす」と解いてゐるのは正しい。孟子に「衿衣を被きて琴を鼓ひき」とあるが「被」の字があれば、その上に楊の
無いことは明かである。後漢の趙岐がこの衿衣に注して、模様の画かれてゐる衣服と解してゐるのは当たらない。云々。

これによつて、公式の服装としては表裘（裘をむき出して着る）といふのはあり得ないのであつて、必ず楊裘（裘の上に
楊を加へる）しなければならないことが窺はれるであろう。さうして論語に見ゆる右の如き公式の絺綌は、皇侃の義疎に
よれば、賓客に接する為に外出する服装だといふことであるから、楊裘も矢張り同様の場合の公式の礼であつたのであら

う。此小説の作者は太宗の服装を「不衫不履」といつて道家的超俗さ乃至は磊落な無造作さを示すと共に、「楊裘而来」と記して、その礼制殊に賓客に会ふ際の儒教的礼制に外れなかつたことを附言し、以て楊素が牀に踞して賓客に会つた非礼と対照的ならしめてゐるのかも知れない。さうして後に虬髯客が長安の自邸に李靖夫妻を迎接した場面についても、此小説の作者は虬髯客が紗帽に楊裘で童虎の如き姿をしてゐたと描いてゐる。この場合の楊裘は、虬髯客がその毫壯な邸宅や物々しい調度の全部を挙げて李靖をもてなし、更にそれを李靖に提供し、自らは中原に望を絶つて東南海上に雄飛の新天地を求めて門出をなした日の服装であり、威儀を正して李靖夫妻に接してゐる点からみても、主人公たる彼が正式な礼をつくして所謂「賓客に見ゆる正装」を以て出て来たと解する方が妥当なやうでもある。さうすれば前の太宗の楊裘も寧ろ同様に賓客に対する正装の意味で「楊裘をきて」と解した方が釣り合がとれるかも知れない。

とはいへ私は「楊裘」を斯様に純儒教的礼制に基づけて解することを固執するものではない。「裘を肌脱ぐ」と訓む前の解釈も興味ある解釈であるばかりでなく、その方がより文学的でもあり、より道家的服装に近いものがあるう。これら二つの解釈は此作品を味読する者の選択に任せるのが自然かも知れない。或は此小説の原典たる原虬髯客伝（所謂「虬髯伝」？）には、この二者択一がもつとしやすいやうに書かれてゐたかも知れない。由来、現存する古典的物語には多かれ少かれ何か原型があつて、それに様々な創意工風や改変が加へられて様々な作品が生れることは自然の趨勢である。現存の虬髯客伝は今のところ杜光庭の撰とする説が有力であるけれども、それは杜光庭の原作ではなく、その前に原本虬髯客伝があつて、杜光庭はその道教的改修者であつたかも知れぬ。これらの点についての考証は尙ほ今後の研究に俟たねばならぬ。

四

次に此小説では真命・天数が強調され、正に道士的口気があるといはれて居り、杜光庭は唐末の有力な道士である点か

らみて、これらのことも此の作者を杜光庭に擬する理由となつてゐるようである。⁵⁾ 隋唐の間に望氣・占候・相人等の信仰が盛んであり、それが天界と人界との合理的説明原理として動かし難い權威を持つてゐたことは、隋書や新舊唐書や通鑑などの史籍を通覧すれば何人にも容易に認められる所であり、必ずしも之を道家的といふより、寧ろ当時の社会の通念であつたと観るべきであらう。尤もより適切には、當時に於ける道家的思想の流行によつて、それが社会通念にまで拡大したといつた方がよいであらう。此小説では真人とか真天子とかが非常に崇ばれ絶対視されてゐる。すなはち李靖は唐の太宗のことを「これこそ真人だと思ふ」として虬髯客に告げ知らせてゐるし、作者は太宗のことを「神氣揚々として容貌は常人と異つてゐる」とも「神氣清朗にしても満坐風を生じ、目差しは光り輝いてゐる」とも記し、これを見た虬髯客をして「真天子だ」と歎ぜしめて居り、末尾に於て太宗の興起を真人の興起とし、常の英雄は之と争つて天子たらしとするも不可能である旨を強調してゐる。真人なるものは清の陶方琦の「真人説」⁶⁾によれば、本来儒家思想には無く、莊・列・淮南に始まる所謂道家的理想型の超人であり、漢末に至つて盛んに行はれ、唐代に於て道家思想の流行と共に愈々盛んにもてはやされるやうになつたものと考へられる。さうして本来真人を意味する真の字は天子の冠せられて真天子の語を生じ、普通の天子と異つた神権的聖天子の意味に使用されたものと思はれる。かくみ来る時は、此小説は間々儒教的表現が混じてゐるとはいへ全体にみなぎる中心の思想は矢張り道家思想であり、それは前にも記した通り時代の時代思潮ともみられるのである。

五

最後に指摘したいことは前にも一寸触れたが易の思想との關聯である。元來、易は儒教經典のうち最も老莊に近く、老莊思想を以て易を解くことは魏の王弼以來稀しいことではないから、此小説の作者も又さうした伝統によつて易の思想を作品のうちに取り入れたのかも知れない。とまれ、此小説の主人公虬髯客は、唐の太宗を見て、その真天子なることを知るに及んで、天下を争ふことをあつさり斷念してしまふのであるが、それまでに「竜戰二三十年一に二三
年に作るにして少しく功

業をたつる所があつた」と李靖に対して自らの天下統一の努力について述懐の言葉を洩すと共に、唐朝の聖主太宗と賢臣李靖の大業の前途を祝福して「(聖賢の)隆興せんとする(貴き)氣運には、万事がうまく際会すること恰もきまつたおきてでもあるかの様で(原文「際会如期」)、虎嘯いて風を生じ竜騰一に吟じてつて雲萃まるのはもとより偶然ではない。私の贈物をもつて真主を佐け功業を賛けられよ」といひ、遂に自ら「今後十余年にして東南数千里外に異つた事があるであらう」との謎の言葉を残して、行方をくらましてしまふのである。右の竜戦といふ言葉自身、既に易の坤の上六に見ゆる「竜野に戦ふ、其の血玄黄」とか象伝の「竜野に戦ふとは其の道窮るなり」といふやうな言葉を聯想せしめるが、文言、乾の初九に

初九に曰く、潜龍用ふること勿れとは何の謂ぞや。子曰く、龍徳ありて隠るゝ者なり。世に易へず、名を為さず、世を遯れて悶ふることなく、是とせられずして慍ることなく、樂しむときは則ち之を行ひ、憂ふるときは則ち之を違る。確乎として其れ抜く可からざるは潜龍なり。

とあるのは、此小説の虬髯客その人の行蔵と畧ぼ一致して居り、小説の作者はこの考のもとに虬髯客を行動せしめてゐるかのやうである。虬髯客が潜龍なるに對し、後にも触れる如く唐の太宗は寧ろ現龍に擬せられてゐるかと思ふ。虬髯客が實在人物唐太宗の投影

あるとの説は先人既に指適するものがあり、私もその説に耳を傾ける。ただし私は虬髯客には唐太宗以外の實在者の影も含まれてゐるやうにおもふ。この点に關しての詳論は別の機会に譲る。

さて同じく文言、乾の九五をみると

九五に曰く、飛龍天に在り、大人を見るに利しとは何の謂ぞや。子曰く、同声相應じ、同氣相求む。水は濕に流れ、火は燥に就く。雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。聖人作りて万物觀る。天に本づく者は上に親しみ、地に本づく者は下に親しむ。則ち各其類に従ふなり。

とあつて、これは九五の爻辞「飛龍天に在り、大人を見るに利し」を敷衍的に説明したもので、自然(天地人)の万物万象が同類相呼応・感応・求引する法則の存在をうたつたものである。此小説の作者は此の法則を全面的に承認し、虬髯客

をして前掲の如く「(聖賢の)隆興せんとする(貴き)氣運には万事がうまく際会すること恰もきまつたおきてでもあるかの如く(原文一に「起陸之貴、際会如期」に作り、一に「聖賢起陸之漸、際会如期」に作る)云々」の言をはかしてゐるのであらう。原文に起陸とあるのは聖人賢人——易の所謂「大人」——の起陸であり、起陸の起は右掲文言の「聖人作りて万物覩る」の「作」に因由するものであつて、この「作」の字は馬融は之を「起」に作つてゐる。陸の字は明かでないが、多分同じく九二の爻辞に「見^〇現^〇竜田に在り、大人を見るに利し」とある田と同義で、従来地下に潜んでゐた竜徳が漸く地上に現れ出でた象を指すものでらう。これも聖人の龍徳が次第に上昇顕現して行く意味を持つてゐて、「聖人起る」と相通ずるものがある。その上、九二の爻も九五の爻も「大人を見るに利し」といふ文句を共通に持つてゐる。要するに此小説にいう起陸とは、易の所謂大人の竜徳の起り現れる意味を指したものと解すべきであらう。尤も起陸は唐人説薈本などには起隆に作つてあり、起隆なれば、九二の爻辞とは關係なく、ただ「聖人作りて」の「作」即ち「起」の字の意味を明瞭にモデファイするために「隆」の字が添加せられたものと解してよいであらう。因に九五の爻辞「飛竜在天、利見大人」は小象には「飛竜在天、大人造也」となつていて、造はナスともシワザとも訓まれ、普通は聖人の作為・生成・經綸の意味に解されてゐるが、伊藤東涯の周易經翼通解には之をイタルと訓んで「就なり。至なり。漢書に聚に作る。聖王上に作れば則ち賢者来至するなり」と解している。東涯の解釈は此小説の作者の見解と最も近く、作者の所謂「起陸之漸、際会如期」とは具体的には唐の太宗の如き聖王が上に起れば李靖の如き賢人が来至することを指したものと思はれる。また起陸の漸という場合の漸は、段々とさうなり進む意味で、聖人が段々と起陸することを指し、これを「起陸之貴」に作るならば、その意味は恐らく竜徳上昇の氣運の貴いことを現したものであらう。それに続く「際会如期」とは上述の如く同類相應の法則の存在を指したもので、期とはさういう自然界の法則を意味するであらう。だとすれば塩谷博士等の邦訳本に「際会期するが如く」と訓まれてゐるのは嚴密には妥当でなく、寧ろ「際会(すること)期おきての如く」と訓むべきではあるまいか。さうして更にその後が続く「虎嘯いて風を生じ、竜騰つて或は吟雲萃おきてまる」という表現は、かかる法則の例証と

してあげられたもので、上掲文言、乾九五の説明中の「雲は竜に従ひ、風は虎に従う」（従うとは何々よりするとか、何より生起するとの意）なる文句に出づるものであることはいままでもあるまい。竜虎が雲や風を喚び起すのであるという如き自然相応の法則（此小説の所謂「万物の際会の期」）は古来支那人に合理的なものテオレティツニユと考へられてゐて、その存在を信ずることは支那人一般の常識となつて居り、彼等の生活に融け込んでゐる。それは民衆的風習とも信仰ともいへるであらう。成る程、その来源を辿れば、易に発し堪輿・天文の学と密接な關係を持つて發達した思想であるとはいへ、既に社会通念的な常識や信仰となつてしまつた以上、さうした根源にまつはる儒教的乃至術数学的色彩は薄れてしまつてゐるわけである。一体、この小説に含有されてゐる道教思想や儒教思想は、既にみて来たように常識の坩堝の中でつき混ぜられ消化されてしまつてゐて、それらの思想の個別性や特殊性や相互矛盾性は無くなつてゐるのである。純粹に儒教思想のみに立ち又は道教思想のみに立つて書かれた小説といふものがあるかどうかは知らないが、若しあつたとしたならばそれはヒドクつまらないであらう。儒教思想や道教思想を按配するとしても、その方法が高踏に過ぎて生硬であるならば世人に廣く読まれないであらう。社会の常識化し大衆性を持ちながらしかもその奥に幾分の深淵さを蔵し、その上渾然と消化されたような儒・道思想の盛り込みに成功した此小説が世人に廣く読み伝へられて来たのは、これまた偶然ではない。しかも此小説の本当の面白さはその政治的背景にあるのであつて、それに比べれば上述した所の如きは寧ろ薄物細故、瑣末な考証にすぎない。しかし政治的背景を論ずる段になると膨大な紙幅を費すので、その発表は他日を期したい。因に今日大方の研究家によつて此小説の作者と考へられてゐる杜光庭その人に關しては楚紫氣 Shutzky の「杜光庭対道教象徴之見解」一冊一七五―一八三頁所収があることを附言して置かう。それによれば、彼が道教經典清静經の註を書いてゐること、清静經には古代道教と周易繫辭伝の外に仏教の影響が認められ、經の本文と真人講文（その中には天人の語も見えて居り、虬髯客伝の中にも天人の語が出てゐる）の二大部より成り、その註本は杜光庭のものを合せて六種あるが、杜註は他本に比べて讚文を殊に重んじてゐる点に特色があること、經の本文は全く抽象的概念を述べたものであるが、讚文は比較的に把

經に於て、天人の語を述べ、經本文の抽象的概念を具象化して居り、それを重視してゐる所に杜光庭の關心が道教理念の具象化にあると考へられる。此の點が、經本文の抽象性を補つてゐるものと考へられる。此の點が、經本文の抽象性を補つてゐるものと考へられる。此の點が、經本文の抽象性を補つてゐるものと考へられる。

握し易く仙人常君の心象を述べ経本文の抽象的概念を象徴化して居り、それを重視してゐる所に杜光庭の関心が道教理念の設象化に在つたと観られることなどが論ぜられてゐる。彼の傾向が道教—易を加味した—理念の具象化にあつたとすれば、彼が虬髯客伝や神仙感遇記をかりて、さういう理念を万人向きの小説に具象化したと推測することはあながち無理ではあるまい。

註

- ① 未発表の拙稿「虬髯客伝とその展開」のうちにそれらを開列して置いた。
脚注参照。
② 国訳漢文大成、文学部、第二卷一九四頁
③ 前掲未発表拙稿のうちにその詳細を開陳してある。
④ Harvard Journal of Asiatic Studies. Vol. XIV, P. 148.
⑤ 張長弓「唐宋伝奇作者暨其時代」四二頁。
⑥ 漢學堂文鈔卷三所收。説文七の部に「真是僊人の形を變じて而して天に登るなり。ヒに々ひ、目に々ひしに々ふ。凡は乗載する所なり」と。昔人謂らく、六経に真の字無く、莊・列の諸子始めて真人の名有りと。方琦按ずるに、許君の真字の解は乃ち真人に仍て説を立てしなり。其説は之を淮南に本づく。淮南の精神訓に「所謂真人なる者は性の道に合するなり。故に有れども而も無きが若く、実つれども而も虚しきが若く、明白太素にして、為す無くして僕に復り、本を体し神を抱きて以て天地樊に遊ぶ」と。又た齊俗訓に曰く「今夫れ王喬・赤誦子・吹呶呼吸して、故を吐き新を内れ、形を遣れ智を去り、素を抱き真に反り、以て玄眇に遊び、上は雲天に通ず。今其道を学ばんと欲して、其氣を養ひ神を処くことを得ずして、其の一たび吐き一たび吸ひ、時に誦み時に伸ぶるのみに放はゞ、其の雲に乗じて升仮する能はざらんこと亦明らけし矣」と。又本経訓に「死莫く生莫く虚莫く盈無し。是を真人と謂ふ」と。許君の僊人形を變じて天に登るの説は即ち此に本づけり。余嘗て謂らく、許君の淮南を誦むは説文解字を成すの前に在りと。説文の一書は多く淮南の字を取れり。此亦た之に依つて説を為せし者なり、秦漢の間より、長生不死の説あり。遂に真人の目を立つ。隸続、五君杯样文に真人君あり。仙人唐公房碑にも亦た真人の称あり。蓋し漢季に至りて其字盛に行はれしなり。
⑦ J. J. M. De Groot: Universalismus. Berlin, 1918, S. 367-7 に民間の土地に占ひに於ける龍の役割が最も重要なことを述べた後、「確かに龍は君治のシンボルであり、虎は勇氣と力と度胸のシンボルである」といつてゐる。
⑧ 前掲未発表拙稿には不十分ながらそれを扱つた。

以上述べた所は何年か前に「虬髯客伝とその展開」と題して一応まとめあげた長編な論考の一部である。顧れば当時私は勤務先の公務として支那に関する色々なリファレンスに応じなければならなかつた。或る日偶々職場の同僚でもあり国際文化振興会職員でもあつた桑原信氏から滞日中の外人（安藤昌益の研究で有名なノーマン博士だと聞いた）からの依頼として短い漢文の解説を依頼されたが、そのうちに虬髯客という語があつたのが動機となつて、公務の余暇リファレンス業務の埒外として虬髯客のことを調べてみた。調べた結果は対象といひ時代といひ、それまで私のやつて来たものと異ふので（もともと私は文学史や思想史の方面はズブの素人で、方法論も問題の立て方も知らない）にはかに発表する勇氣も機会もないまゝ久しく筐底に放置した。昨秋以来私の職場も住所も東京から大阪にやつて落付かぬ日が流れた。たゞさえ不勉強な私は本誌に原稿の提出を求められ、あはて、新に論文を書きかけたけれども間に合ひさうもないし、一つには博雅の諸先生に旧稿に対する教へを乞ひたい意味もあつて、生兵法とは知り乍ら、このやうなものを差出して責をふさいだのである。幸に諸先生の御高教をえられ、ば此上ない幸である。

終に付け加へて置きたいことは、今夏上京の折に葉楚傖（主編）・胡倫清（編注）の国文精選叢書のうちの「伝奇小説選」なる一書を目観したことである。そのうちに虬髯客伝も收められ、末尾に注釈が加へられてゐるが、注釈の（一六）に龍戦。易「龍戦於野、其血玄黄」。言陰陽交戦也。後因謂群雄割拠之際為龍戦。とあり、（一七）に起陸之漸際会如期。言蛟龍起陸、風雲際会、所以喻人之驟貴也。とあり（一八）に虎嘯龍吟。易「龍吟則景雲出、虎嘯則谷風生」。喻英傑均随真人而起也。とあつて、いづれも易との關係に觸れて居る。私は寡聞にして今まで此書のあることを知らなかつたが、此書の奥付によれば民国二五年三月初版、同四一年十二月台一版とあるから、可成り古いものを台湾で重版したやうである。同じく注釈（二二）に褌褌。褌也。在衣曰褌、在褌曰褌。とあるが、「在衣々々」といふことが何に基づいた説であるか、私にはわからない。但し褌褌といふ語は前漢書卷五十三景十三王伝のうちにも「望卿袒褌して其傍に伝粉す」とある様に、着物を脱いで裸になる意味の成語となつてゐることは確かである。